

---

# 続ニルトニア物語

和泉 彩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

続ニルトニア物語

### 【Nコード】

N4750W

### 【作者名】

和泉 彩

### 【あらすじ】

処女作ニルトニア物語の続編で、3年後の世界になります。前作で、オンラインゲームから出会った二人が、その後、また色々な事に悩んだり葛藤しながら、成長していくストーリーです。

## 第一章（前書き）

たぶん一番最初の警告に、「この小説はBLです。苦手な方はご遠慮ください」的な警告が出るかと思いますが、私は、この小説はBLだと思っと思っています。

男同士の恋愛と言うより、もっと大きな人間愛を書いたつもりです。ただ、BLっぽい描写が出てきますので、苦手な方が読まれて嫌な思いをされてしまうといけないので、「BL」とさせていただきませんでした。

それから、この「続ニルトニア物語」は、完全に前作「ニルトニア物語」の続きになっております。

抱き合わせ商法みたいで申し訳ないのですが、前作の「ニルトニア物語」を読んでいただいてないと、何が何だか分からないと思いますので、「続ニルトニア物語」を読む前、またはちよつと読んでみて、先も読んでみようかな、なんて思っってくださいたときなどに、前作の方を読んでいただければ、と思います。

ただ、前作の「ニルトニア物語」は、処女作の上、初めて苦手な一人称で書いた小説ですので、文章的に今の私の小説よりかなり読みにくいと思います。

（ちなみに「続ニルトニア物語」も一人称で書きましたので、やはり読みにくいかもです。）

こうして、お願いするのも申し訳ないくらいなんですが、本当に続きのお話なので、前作から読まない、話がさっぱり分からないのではないかと思うので、もしそれでも「読んでやるよ」「っていう方がいらっしやいましたら、どうか、前作と併せて読んでいただければ、嬉しく思います。

他に詳しい前書きは個人のブログに書きました。

ここに書くべきではないのかもしれませんが、「桜の咲く頃に」の

詳しいあとがきも、ブログに載せてあります。

「桜の咲く頃に」を、楽しく読んでくださった方がもしいらっしやいましたら、そちらも、よかったら読んでいただけるとうれしいです。

## 第一章

僕がいつものように、学校へ行く支度をしていると、母親が僕を呼びに来た。

「今日も藤崎君が、もう迎えに来てるわよ。早く支度しなさいよ」  
その、ほぼ毎日聞かされるセリフを聞きながら、僕は大きなため息をついた。

、また今日も、同じ朝から始まるのだ、と。

\*\*\*

「あのさー、僕らもう高校2年になったんだぜ？ 毎日毎日僕の家まで迎えに来るとか、小学生じゃないんだからさあ……」

僕は、通っている高校へ向かう途中、電車のつり革につかまりながら、周りに聞こえない程度で、隣にいる藤崎涼に文句を言った。  
「でも、僕たち家が近所だし、同じ高校に通っている訳だから、一緒に行くの別におかしくないと思うけど」

しかし、藤崎涼は、僕の文句にも全く動じないで、相も変わらず整った容顔で、ほほ笑んでくる。

まあ確かに、オンラインゲームの「ニルトニア物語」を二人そろって卒業したあと、僕たちは、同じ中学で、リアルに親友となり、楽しい時間をたくさん過ごしてきた。

そして、中学卒業後は、こうして同じ高校に通っているのである。  
しかし、普通に考えれば、僕と藤崎涼が同じ高校に通う、というのは、誰から見てもあり得ないことだった。

なぜなら彼は、学年トップの成績だったのだから、当然、教師たちも、他の生徒も、県内のトップクラスの進学校へ進むはずだ、と思っていたからだ。

しかし、実際僕たちが通っている高校は、トップクラスの進学校で

もなんでもなく、一応進学校とはいえるだろう、という程度の、高校学力レベルでいえば、真ん中より少しだけ上、くらいの高校だった。

それもこれも、僕が進学できるレベルの高校といえば、これくらいの学力レベルしか無理だったので、特に行きたい高校とかもなかった僕は、教師の勧めで、今の高校を選んだだけだったのだが…。

驚いたのは、藤崎涼までが、僕と同じ高校に行く、と言いだしたことである。

僕の進学先の高校は、一応進学校、と呼べる範囲にはぎりぎり入ってはいしたが、それでも学校で成績がトップの藤崎涼が行くべき高校としたら、あまりにも不釣り合いだったからだ。

まあ、僕と藤崎涼が同じ高校に進学しようとすれば、僕が彼に合わせる、県内トップクラスの進学校に進むなんて無理な話だから、藤崎涼が僕の行く高校に合わせるしかない。(別にそんなこと一度もお願いしたことはないのだが)

そのことについて、彼の両親が何と言ったのかは知らないが、当然教師たちは大反対した。

藤崎涼の将来のことを思って、とかそんなことを言っただけだが、それは建前で、学校一の秀才を、県内屈指の名門進学校に進学させれば、中学の評判も上がるからだろう。

そんな中学の切り札的存在である彼を、みすみす名もない高校にくれてやることはできない、そう考えた教師たちと藤崎涼は、激しく対立した。

僕は、藤崎涼と会ってから、彼が怒るところを一度も見たことがなかったのだが、ある日の進路相談で、彼が教師たちに怒っている場面を見たことがある。

「僕が行きたい高校に行つて何が悪いんですか。僕の将来のことなんだから、先生たちが決める権利なんてないはずです」

彼にしては珍しい強い口調で言う藤崎涼に、最初は驚いた。

しかし、散々教師たちに何度も同じことを言われて、さすがに我慢

も限界にきていたのかもしれない。

けれども、教師たちは、そんな藤崎涼の態度にも全く動じなかった。「じゃあそもそも、そんなにその高校に行きたいという理由は何なんだ？　それが分からなければ、みすみす君の将来を棒にふるせるようなことを、黙って見過ごすわけにはいかないな」

「僕の友達が、その高校に行くからです」

藤崎涼が、自信に満ちた表情でそう言った時、その教師は大笑いした。

「ははっ。君は頭がいいと思っていたが、まさかそんな馬鹿げた理由だったとはね。友達といたって、いくら仲良くしていても、高校で離れ離れになれば、自然とその存在なんてどうでもよくなる。だけど、新しい高校で、また新しい友達ができる。」

いわば、友達なんてものは、所詮使い捨ての道具みたいなものだ」その教師の言葉は、涼の逆鱗に触れた。

「優は、使い捨ての道具なんかじゃないっ！　僕のかけがえのない人だっ。次、優のことをバカにするようなことを言ったら、いくら教師でも　僕はあなたを許さない」

その時の、藤崎涼の恐ろしい目は今でも忘れられない。

彼は、教師に暴力をふるったのでもなんでもなかったが、彼の研ぎ澄まされた刃のような目は、実際に、刃を突き付けているのと同じようなものだった。

それくらい、鋭くて恐ろしい目だった。

進路相談の教師たちは、もちろん皆驚いて、中にはきつと恐怖を感じた者もいただろう。

皆、その先に何も言えなくなってしまう、そんな彼らを置いてきぼりにして、藤崎涼は、さっさとその場を立ち去ったのだった。

僕は、藤崎涼のそんな姿に驚いたのはもちろんだったが、戸惑いを覚えたのも確かだった。

二ルトニアにいるときから、彼が、僕をずっと「特別だ」と言ってくれていたことの意味が分からなかったからだ。

穏やかな性格の彼をキレさせてまで、僕のことであんなにも怒る彼の心が分からなかった。

もちろん、僕にとつても、藤崎涼はかけがえのない親友だったし、僕がこうして今、中学で、他の皆とうまくやれているのも、彼のおかげだったから、感謝だっと思ってしていた。

(だけど……どうしてそこまで?)

今思えば、このときから、僕と藤崎涼の心の溝はでき始めていたのだった。

\*\*\*

高校2年の夏。

僕は、中学で入ったサッカー部が楽しかったので、高校でもサッカー部に入っていた。

高校2年といえば、そろそろ進学したい大学などを決めて、それへ向けて受験勉強を始める頃なのだが、正直将来のことなんて何にも考えていなくて、興味もなかった僕は、サッカーに夢中だった。

ただなぜか……同じ部活にまで、藤崎涼はいた。

「なんで、涼まで、僕と一緒にサッカー部に入ってくるんだよ」

最初、一緒に入部した時、僕はさすがに呆れて、脱力感を覚えながらそう言った。

「えー? だつて、僕、中学の時は生徒会を無理やりやらされていて、部活なんてできなかったから。そんなとき、優はとっても楽しそうだったからね。僕もやってみたくなくなった」

僕の呆れた様子すら、全く意に介さずに、やはりにこにこ笑って彼は言った。

「だからつて、朝から帰り道までずーっと一緒にいるんだから、部活まで一緒にやることないだろ……」

「僕は、優が楽しそうにしていることなら、一緒にやりたい」

満面の笑顔でそう言われて、それ以上、僕は何も言えなかった。

実際に、部活をやってみて分かったのだが、彼は、体育の授業くらいでしか、サッカーなんてやったことないはずなのに、皆が驚くほど、サッカーがうまかったのだ。

藤崎涼がもとも運動神経がいいのは、僕も知っていた。

頭もいいし、容姿も端麗、スポーツもできる、おまけに細身ですらりと背が高い彼は、中学でも女子に人気ナンバーワンだったが、それは、今の高校でも変わらなかった。

(天は二物を与えず、なんて言うけど、大ウソだよな...)

逆に、何一つ秀でたものを持っていない僕は、うらやましいと思うのを通り越して、妙に達観してしまっていた。

現に今、サッカー部のマネージャーをやっている同じ学年の女子だって、藤崎涼のことが好きなのは、誰から見てもすぐ分かった。

藤崎涼に対してだけ、しぐさも、態度も、他の部員と全然違っていたから、気づかない方が、鈍感すぎる。

(ああ、でもひとり、そんな鈍感がいたな)

それは、藤崎涼、本人だ。

## 第二章

ある日の放課後、毎日のように、一緒に帰ろう、と誘いにくる藤崎涼に、僕は、今日は進路のことで、担任の先生に呼び出されているから、悪いけど先に帰って置いてほしい、と彼の誘いを断った。

「じゃあ、それが終わるまで、待ってる」

やっぱり予想通りの答えが返ってきたので、僕はもう何も言い返す言葉もなく、ああそう、とだけ言った。

（そんなに優しそうな笑顔や気遣いは、僕なんかじゃなくて、藤崎涼のことが好きな女子にあげればいいのに）

例えば、あのサッカー部の、藤崎涼に真摯な想いを寄せているマネージャーだとかに。

僕はそんなことを思いながら、呼び出された放課後の教室に入ってしまった。

\*\*\*

僕が、進路相談のことで呼び出されたのは、僕が志望大学を第三希望まで書くようになっていた、進路希望用紙を、白紙で提出したからだった。

「高井君、この白紙、っていうのは、どういうことなの？」

先生は、不思議そうな顔をしていた。

しかし、僕はなんでもないことのように、さらっと言った。

「行きたい大学とか、特にないんで。僕が行けそうな大学、適当に見つくるって、先生、決めてくれませんか。例えば、模試でAとかB判定が取れそうなところ」

僕の言った言葉に、担任の先生は心底驚いて啞然とした。

「いや…適当に見つくるって…って。そもそも、大学といたって、理系と文系、もっと細かく学部や学科に別れているし、県内の大学

に行きたいのか、それとも県外に行きたいのかとか、国立を目指すのか私立がいいのかとか。あまりに選択の幅がありすぎて、君の将来を、そんな簡単に勝手に先生が決めることなんてできないわ。まあうちのクラスは理系だから、理系だつてことくらいはもう決まっているけど……」

今まで、そんな生徒などいなかったのかもしれない、あまりに先生は困惑した表情をしていた。

「じゃあ、家にいるのも窮屈だったんで、県外の大学で。国立とか私立とかは希望はないです。ああ、それを言ったら、学部も学科も希望はないなあ……」

「高井君は、将来の夢はないの？ 就きたい職業とか」

「ないですね。なので、本当、適当に決めてもらってかまわないです」

きつぱりと、そう僕が言いきると、先生はため息をついた。

「じゃあ、今はとりあえずそうしておくけど、ちょっと考えてみてね。もし、何か見つかったら、教えて」

「はい」

そう返事をして、教室を後にしたが、僕は今さら将来の夢とか考えようなどと、さらさら思っていないかった。

適当にどこかの大学に入って、適当にどこかに就職が決めればいい。人生なんて、そんなものではないか。

(夢とかそんなの、現実離れしてるよ)

そう、人生なんて、流れに身を任せるように、自然と決まってしまうものなのだ。

\*\*\*

「優はさつき、何で呼び出されたの？」

廊下にもたれかかりながら、僕を待っていた藤崎涼は、僕の姿を見つけると、すぐにそう聞いてきた。

「あー進路希望用紙を白紙で出したから。別に行きたい大学とかないし。だから、模試でAとかB判定とれそうな大学を適当に決めてくれて頼んできた」

それを聞いた藤崎涼はくすくすおかしそうに笑いだした。

「なんだよ？」

「いやさ、僕も行きたい大学とか全然ないけど、さすがに、進路希望用紙を白紙で出したりはしないから。優ってけっこう大胆なんだね」

まだおかしそうに笑う涼を、僕は軽くにらんだ。

「涼だつて行きたい大学ないんじゃない？。そういの、50歩100歩つて言うと思うけど。ちなみに、行きたい大学なくせに、涼は志望大学なんて書いたの？」

「んー、第一志望が東大。第二が京大。第三早稲田つて書いたかな。別にほんとは行きたい訳じゃなくて、どこも模試でA判定だったから書いただけ」

なんでもないことのように、さらりと話す藤崎涼に、僕は、めっちゃくっちゃ驚いた。

「はあー？ 東大に京大に早稲田が全部A判定！？ …お前、どーいう頭の構造してるんだよ…」

元々、藤崎涼が頭がいいとは思っていたが、全国模試でそんな結果がでるほど頭がいいとは知らなかった。

「でも、たぶん行かないよ？ 優みたい在白紙で出す度胸があったら、そうしてた」

他の誰かが聞いたたら、泣いてうらやましがらるようなことだということに、藤崎涼は、そういった有名大学に全く興味がないようだった。

「涼も、夢とか、やりたい仕事とかないから？」

僕は、さつき先生に聞かれたことを思い出していた。

「夢かあ…。考えたことなかったな…」

「そんなにいい大学に入れるのなら、たいていの夢くらい、叶えられそうなのにな」

「将来やりたいこととか考えても、全然想像つかないし、世間的にいい大学って言われてる大学に行くことも、興味ない。僕は…」  
そこまで言って、藤崎涼はうつむいた。

夕日があたって綺麗なオレンジ色に照らされた彼の横顔を見ながら、僕は彼の言葉の続きを待った。

「僕は…優と一緒にの大学に…行きたい…」

聞こえるか聞こえないくらいの小さな声で、藤崎涼はそう言った。その時の表情が、まるで、好きな相手に大事なことを告白するような、恥ずかしそうな、それでいて嬉しそうな表情だったから、僕は少しイライラしてきた。

「はあ？ またそれ？ 高校入学のときも、もっという高校に行けたのに、僕と一緒にの高校に行きたいとか言って、勝手に一緒にの高校きて、その上部活も一緒に。朝と帰りの通学も一緒に。もういい加減にしてくれよ」

僕は、高校も僕の学力に合わせてもらって、さらに大学まであわせてもらうなんてみじめだと、つい思ってしまったのかもしれない。それとも、ずっと心の中でわだかまっていた、藤崎涼がいつも僕と一緒にいたがるという気持ちや行為を理解できないことへの不満が溜まっていたのが、ちょうど爆発してしまったのかもしれない。

とにかく僕は、イライラした口調で、藤崎涼に不満をぶつけた。

僕が藤崎涼と出会ってから、そんな口調で彼に何かを言ったことは一度もなかった。

だから、藤崎涼は、ものすごく驚いていた。

そしてそのあと、ものすごく悲しそうな表情をした。

僕も言ってしまった後、ちょっとひどいことを言った、と後悔したが、すでに発してしまった言葉は取り消すこともできない。

「…ごめん、優。優の気持ちとか全然考えてなくて…。勝手なこと言っちゃったね」

そう言って謝ってくる藤崎涼の笑顔が、あまりに寂しそうで、ちょっと触れただけでも壊れてしまいそうなくらい儂げな表情だったか

ら、僕の胸は痛んだ。

「…僕の方こそ言い過ぎた。ごめん」

だから、藤崎涼から視線を外して、それだけ言うのが、やっとだった。

その後の帰り道も、二人は無言のまま帰宅した。

こんなに一緒にいて、気まずい思いをしたのは、藤崎涼と初めて出会った日から、いや、ニルトニアで一緒にいたときからも、初めてのことだった。

\*\*\*

僕と藤崎涼は、相変わらず気まずい状態のまま、あれから何日かを過ごしていた。

いや、正確に言えば、どうしても顔を合わせなければならぬときだけ、気まずいまま過ごしていた。

まず、朝、藤崎涼は、僕の家を迎えにこなくなった。

サッカー部の練習も、何かと理由をつけてやっぱりこなくなった。

藤崎涼は、僕に嫌われていると思ったのか、うざがられていると思っただのか、極力接触を避けるようになった。

（はーっ。そういうんじゃないんだけどなー）

僕は、藤崎涼のいないサッカー部で練習をしながら、一人ため息をついた。

これまで藤崎涼と過ごしていた時間

最初はニルトニアで、

そのあと、同じ中学のクラスで、それらは何にも代え難く楽しい時間だと思っていた。

彼と一緒にいると、一番自分らしく自然体でいられて、いつも笑いが絶えなくて、これからもずっと一緒にいたい、と心の底から思っていたはずだった。

僕にとって藤崎涼は、いつしかかけがえのない人になっていた。

それなのに、いつからだろう。

藤崎涼といつも一緒にいることに、ふと疑問を感じだしたのは。なにか、きつかけがあったわけじゃない。

ただ、いつもいつも隣に彼がいることが、当たり前のことになっていて、僕はそのことをなぜだろうと、気になりだしてしまったのだ。昔は、一緒にいることに、理由なんていらなかった。

ただただ、共にいられることが嬉しかった。

それが、毎日毎日繰り返される当たり前のこととなったとき、僕の中で、彼と一緒にいる意味が分からなくなってきたのだと思う。

藤崎涼のことが嫌いになったとか、そんなことではないのだ。

むしろ、今だって大好きだ。

だから、こんなきままずい状態がずっと続くのかと思うと、自然気持ちは沈んでくる。

でも、やっぱり、僕の心のわだかまりは、どうしてもぬぐいきれなくて、僕はどうしていいのか、分からなかった。

### 第三章

その日の部活の後、僕はマネージャーの太田さんに呼ばれ、こっそり耳打ちされた。

「ちよつと高井君にお願いしたいことがあるんだけど…。皆の前じや話しにくいから、今日の帰り道、もし時間があつたら少し話を聞いてくれない？」

「…別にいいけど」

それを聞いた僕は、お願い、というのは、藤崎涼に関することだろう、とすぐ推察した。

藤崎涼と一番仲がいい僕にするお願いで、彼に好意を持っている彼女がするお願いなんて、それ以外思いつかなかつたからだ。

ただ

(藤崎涼についてのお願いか…)

それなら、こつちがお願いしたいくらいだけど。

僕の心は複雑だった。

\*\*\*

「あ、あのね…わ、私、実は、その…藤崎君のことが…」  
「好きなんですよ？」

僕がそう言つと、太田さんは、何で知っているんだ、というものすごく驚いた顔をした。

(やれやれ、鈍感なのは、涼だけじゃなかつたわけだ)

あれだけ、部活内で露骨に態度に示していれば、彼女の気持ちに気付いていない人などいないのに。

そんなつもりもなく、自然に振舞つてしまつていたからなのか、僕どころか、他の部員全員周知の事実だと言つのに、そのことに太田さんは全く気付いていないようだった。

「…な、なんで分かったの？」

顔を真っ赤にして、恥ずかしそうに言う太田さんのために、僕は、  
(みんな知ってるよ。本人以外は)

と言いたかったが、あえて言わずにおくことにした。だから、  
「まあ、なんとなくそうなんじゃないかって思ってたから」と、  
と、適当に言葉を濁しておいた。

「…そ、そっか。それで、その…告白したいんだけど、普通に告白しても、ダメな気がするんだよね。できれば、彼と少しでもいい雰囲気になって、告白したいというか…」

「いい雰囲気になって、ねえ…。例えば、どんな感じに？」

藤崎涼が、特定の女の子といい雰囲気になるところを、僕は全く想像できなかった。

「うん、そこで、高井君にお願いがあるんだ。3人で、今度の日曜日に遊園地で遊べないかな？　そこで、もし藤崎君といい雰囲気になれば、頑張って告白しようと思うんだけど…」

「は？　なんで、3人で？　デートなら二人で行ってこればいいじゃない」

「二人きりは…ダメだよ…。だって何話していいのかとか、全然分からないもん。余計気ますぐなっちゃうよ！　だから、お願いっ。一緒に来て。それで、できたら、その…藤崎君とお近づきになれるような、雰囲気とか、会話とか、そういうのを作ってもらえたら、すごい嬉しいんだけど…ダメ…かな？」

太田さんは、必死な眼差しで、少し目を潤ませながらそう頼んできた。  
その真剣さに僕は少し圧倒されたが、まあ、恋する女の子としたら、当然か、と思い直した。

だから、別に、彼女と藤崎涼がどうなるうが、僕には、全く興味のないことだったが、必死な彼女の頼みをむげに断るのも悪い気がした。

「…いいよ。今度の日曜日ね」

「ありがとう！ 待ち合わせは、駅前に午前9時で、それから…」  
次々嬉しそうに計画を語りだす太田さんの言葉を僕は途中で遮った。  
なぜなら、一番大事なところを聞いていなかったからだ。

「ところで、肝心の涼は、太田さんが誘うんだよね？」

「……うう。それも、高井君にお願いしてもいい？」

(それもか…)

僕は心の中のため息をついた。

「…いいよ。分かった。僕から涼に伝えておくよ」

「ほんとに色々、ごめんね、ありがとう、高井君」

今にも泣きださんばかりの太田さんを目の前にして、僕は焦ってつい余計なことを言ってしまった。

「いや、ちょうど涼に話しかける口実ができてよかったかもしれない」

言った後、はっと気づいて、しまった、と思ったが、太田さんは特に僕の言ったことについて、気にしている様子はなかった。

「ま、まあ、ちゃんと涼には伝えておくから。その…うまくいくといいね」

それでも、僕は慌てて取り繕って、適当にその話をまとめた。

「うん、ありがとう」

そう言っつて、満面の笑みを浮かべる太田さんを、かわいい、と僕は思った。

別に、彼女の顔がかわいいかさういいうのではなくて、好きな人のことを想って笑う時、人はこんなにかわいくなるのか、と僕は思ったのだった。

## 第四章

僕はその日の帰り、早速近所の藤崎涼の家に寄った。

そして、しばらくぶりに面と向かって会話する彼に、まともに視線も合わせられず、どんな言葉をかけていいのか迷いながら、僕は今日太田さんに頼まれた計画を伝えた。

「今度の日曜って、暇？」

突然、そんなことを言い出した僕に、藤崎涼は怪訝そうな顔をした。いくら、頼まれた用事があるとはいえ、この一週間あまりの間、藤崎涼とは、まともに口を聞いていなかったのだ。

いきなり、なんと切り出しているのか、僕は分からなかった。だから、そんな突拍子もないことを、ぶっきらぼうに尋ねてしまったのだった。

「…うん。特に用事はないけど…」

「サッカー部のマネージャーの太田さんと、3人で遊園地行かない？」

（ああ…なんていう誘い方をしてるんだっ）

いくら、これまでの間少し気まずかったとしたって、もっと他に言い方があるだろう、などと思うのだが、どうしても意識ばかりしてしまつて、普段のように、自然に話しかけることができない。

「……」

藤崎涼は、しばらく考え込んでいる様子だった。

それはそうだろう。

藤崎涼は、女の子にモテていたが、僕の知る限り、デートなんてしているのを見たことがなかった。

そんな彼が、突然のそんな申し出に躊躇しないわけがなかったし、最悪の場合、断ってくるかもしれない、と僕は思った。

「いいよ。…そっか、優は太田さんのこと、好きだったんだ」

しかし、意外にもあっさりオーケーした、と思ったら……。

(思いつきり勘違いしてるじゃねーかアアア！)

「いや、だから、それは、違って…」

藤崎涼と久しぶりに面と向かって話すことに意識しすぎて、言葉短に要件を伝えてしまったことを、僕は後悔した。

(頭はいいくせに、こいつ…ものすごく鈍感なんだった…)

僕は頭を抱え込んだ。

僕の必死の弁解も、照れているのだと、藤崎涼は勝手に勘違いしているのだろう、嬉しそうに笑っていた。

「そっかぁ。優も好きな子いたんだね！ 僕、応援するから」

(ああ、だから違うんだってば)

と、思いながらも、まあ当日、僕が気を利かせて、二人がいい雰囲気になるようにすれば、問題ないか、とも思うのだった。

何しろ、太田さんは、藤崎涼といい雰囲気になれたら告白する気であるのだから、ここで、僕が彼女の気持ちを伝えてしまうわけにもいかない。

まあ、当日なるようになるさ、と僕はこの場で深く考えるのをやめた。

## 第五章

日曜日の当日。

普段、体操服姿か、学校の制服姿しか見たことのない太田さんは、男の僕から見ても、精一杯のオシャレをしてきていた。

まあ、それも当然といえば、当然だろう。

好きな相手とのデートで、うまくいけば、告白までしようと考えているのだから。

そりゃあ、気合も入るといふものだ。

3人は、どの乗り物から乗ろうか、とか色々計画を立てて、たくさんのアトラクションに乗ったり、見たりして遊んだ。

（なんか：僕が存在っていうか：そもそも3人って、おかしくないか？）

などと、僕は思ったりもしたが、精一杯気を利かせて、なるべく二人がいい雰囲気になるよう、気を使った。

「次、あれ乗りたいない」

太田さんが指さしたのは、絶叫系のジェットコースターだった。

「あー、ごめん。僕、絶叫系って全然ダメなんだよね。悪いけど、二人で乗ってきてくれない？」

僕は、別にジェットコースターなど、全く平気な方だったが、あえてそんな嘘をついた。

「そっか。じゃあ、太田さん、僕と二人で乗ろうか。優は下で見ていてよ」

そう言つて、優しく涼が太田さんを誘うので、彼女は、目を輝かせて、はい、とうなずいた。

（ふーん。まずまずの雰囲気じゃない）

笑いながらジェットコースター乗り場へと向かっていく二人を、僕は見守っていた。

\*\*\*

昼ごろになって、外にあるテーブルに座って、適当にその辺の店で買ってきたものでランチを取っている間も、僕は、なるべく二人が会話をするように、心を配った。

僕のこれまでの気配りのかいもあって、二人は笑顔で談笑したり、長い間話し込んだりもしていた。

「でね、でね、それでね…」

ランチの間も、太田さんは嬉しそうにはしゃいでいた。

身振り手振りで色々話していたその時、彼女の手が飲みかけのお茶に当たってしまい、お茶の入ったコップがひっくり返ってしまった。幸い、テーブルの上でひっくり返ったので、太田さんの服にお茶がこぼれることはなかったが、こぼれた後のお茶のコップには、もうお茶は残っていないかった。

「あ、ああ、どうしよう…」

慌てて動揺する彼女に、新しいお茶を買ってくる、と言って僕は席を立とうとした。

それを、涼が制止した。

「いいよ、優。僕のお茶、太田さんにあげる。飲みかけで悪いけど、ほとんど飲んでないから、よかつたらどうぞ」

そう言って、にこにここと笑って、涼は太田さんに自分のお茶を差し出した。

「あ、ありがとう」

涼の手から、お茶を受け取る太田さんの手は、少し震えているように見えた。

真っ赤な顔をして、きつともものすごく動揺しながら受け取ったのだろう。

それでも、受け取った後は、とても嬉しそうに、彼女は笑った。

(うーん。ほんとにいい雰囲気じゃない)

僕は、二人を見ながらお見合いの進行役のような気分になっていた。

「この後は、若い二人で…」

とかいいたしたら、おかしいな。

なんて、心の中で笑っていた時、僕は、あることに気がついた。

太田さんの持つている、元涼のお茶。

それを飲めば、か、間接キスじゃないか！

（ちょ、ちょっとそれは、いくらなんでもマズイんじゃないかな）

高校生の間接キスくらいで、一体何が、マズイ、のか僕は分からなかったが、急に僕は焦り始めた。

そして、太田さんが、ゆつくりと、そのお茶のストローに口づけるのを、僕は、息をのんで見つめていた。

太田さんの唇がストローに触れた時、僕は、なんともいえない喪失感を感じていた。

何故かはわからない。

ただ、寂しくて、悲しかった。

きっと、もしこのまま二人がうまくいったら、涼が僕だけのものではなくってしまっからなのだ。

いや、もともと、涼は僕のものなんかじゃない。

涼は…、涼は…。

（ああ、僕は涼のことが好きなのかもしれない）

それは、恋とかそういうものではなく、僕が忘れていた、あの幸せで大切な日々を、瞬時に思い出したからだだった。

僕の隣にいつも涼がいて、二人で笑い合った日々。

真剣に語り合った日々。

僕には涼が必要で、ずっと一緒にいたいと思っていたあの頃の気持ちを、僕は、まるであの頃にタイムスリップしたかのように、ありありと感じていた。

それが、いつの頃からか、おそらく二人が一緒にいることが当たり前になっていった頃から、僕はそのありがたさを忘れ、いつまでもガキくさいなんて、周囲の目を気にしだして、自分の本当の気持ちに分からなくなっていた。

そして、涼を傷つけた。

(ごめん…。ごめん、涼)

僕が悲しい気持ちに沈む向こう側で、二人の楽しそうな笑い声が、まるでずっと離れた遠くの方から聞こえてくるようだった。

\*\*\*

帰り際、涼は、夕方に少し用事があるから、先に帰るね、と僕たちに言つて、一足先に帰つて言った。

だから、遊園地からの帰り道は、僕と太田さんの二人きりだった。

「今日は、ほんとにありがとね、高井君」

「いえいえ。それより、二人ともいい雰囲気だったね。これなら、後で告白できそう？」

僕の問いかけに、今までとても嬉しそうにはしゃいでいた太田さんは、うつむいて黙ってしまった。

どうしたんだろう？ と気になって顔を覗き込むと、とても悲しそうな顔を、彼女はしていた。

「…告白は、しない。しても、無駄だから」

「え？ どうして？ 二人ともあんなにいい雰囲気だったのに…」  
僕は、正直に驚いた。

(だって二人は、か、間接キスマでしたじゃないか…)  
「そう見えた？」

僕の方を向いてそう尋ねる太田さんの表情が、相変わらず悲しげだったので、僕は何も言えなかった。

そんな僕を気遣つてか、彼女は大きく伸びをしながら、何でもないことのように、少し笑ってみせた。

「全然、そんなことなかったよ。藤崎君、一見すごく楽しそうに話してたけど、ずっと他のこと考えてるみたいだった。ううん、きっと、別の人のこと考えてた。私を見ているように見えて、私なんか通り越して、その先にいる人を見てるの。…彼の好きな人をね」

「え　　！　涼に好きな人！？　そんな話聞いたことないけど…。勘違いじゃないかなあ…。？」

僕と涼は、中学時代からの親友同士だったが、お互い好きな女の子がいるとか、そういう話をしたことは一度もなかった。

だから、単に太田さんを励ますため、というより、本心から驚いて、僕はそう言った。

「ううん、勘違いじゃないと思う。藤崎君、きっと、好きな人いるよ。今日一日一緒にいて、そう思ったよ」

（ううん。涼に好きな人…かあ）

今まで一緒にいて、そんな様子も素振りも見えた事がなく、もちろん話も全く聞いたことなかったので、太田さんに確信を持ってそう言われても、全然実感がわいてこないのだが、涼だって、高校2年の健全な男子なんだから、まあ、好きな子くらいいてもおかしくはないのかもしれない。

「今度さりげなく、涼に聞いてみようか？　…その、好きな人はいるのか、とか」

僕が太田さんを気遣ってそう言うと、彼女は笑いながら首を振った。

「いいよ。高井君には、今日十分お世話になったし。ここからは、自分で頑張ってみるから。ほんとに今日はありがとね」

無理して笑顔を作った彼女を見送って、僕は太田さんと別れた。

## 第六章

その日から僕は、涼についてひとりぼーっと考えることが増えた。まず、僕はそもそも、涼のことをどう思っているのか、ということ。もちろん親友なのだが、ならばなぜ、あのとき涼と太田さんが間接キスをしたとき、あんなに、悲しくなったのか。

僕は涼に恋しているのか？

だからやきもちをやいた？

いや、それはない。

初めて会った時は、涼はクラスの人気者で、対する僕は、クラスでひとりぼっちだった。

そんな誰からも好かれる涼と、誰とも打ち解けられない僕。

こんな対照的な二人が、いつからか、常に二人一緒に過ごすようになっていた。

みんなの人気者の涼を、僕のような存在感の薄い人間が一人占めするのを、最初は申し訳ないって思ってたっけ。

でも、いつしかそんなこともどうでもよくなって、ただただ、一緒にいることが嬉しくて、ずっとこのまま一緒にいたい、と思うようになっていた。

でも、思い返してみれば、ニルトニアでレインと出会った時も、あんなに一緒にいて、心が落ち着く人なんて、他にいなかった。

最初から 涼は僕にとって特別な人だったんだ。

ああ、そういえば、涼が僕のことを「優ってよんでもいい？」って聞いてきたとき、理由を聞いたら、彼も、「僕のこと特別だから」と笑っていた。

その時は、何故僕が彼にとって、特別、だったのか、ずっと分からないままだったけど、今なら分かる気がする。

もしかしたら、涼も僕と同じように、僕と過ごす時間が、何より自然体でいられて居心地がよかったのではないか？

そんな人と、そうそう出会えるものじゃない。

だから、涼は、僕と同じ高校にきたし、朝も迎えに来るし、とにかく一緒にいたいのだ。

そして、僕も、おなじ気持ちなんだ……。

できるなら、いつまでも涼と二人でいたい。

そこまで、考えたとき、太田さんが言っていたことを、僕は思い出した。

『藤崎君、きつと、好きな人いるよ』

もしそれがほんとうなのだとしたら、僕は…少し寂しい。

\*\*\*

毎朝の通学電車でも、ふと気付くと僕はそんな物想いにふけっていた。だから、電車がカーブを曲がるときに、僕は体勢を崩して、倒れそうになった。

「危ない、優」

咄嗟に、隣にいた涼が僕を抱きとめてくれたおかげで、僕は、倒れずにすんだ。

「あ、ありがとう」

涼に抱きとめられた時、僕はその温かさに、懐かしさを感じていた。そうだと、ニルトニアで会うときは、いつもパソコンの向こうに涼がいたから、彼の温もりなんて感じられなかったのに、レインにもう二度と会えないと泣く僕に、正体を打ち明けるとき抱きしめてくれたあの時。

（ああ、温かい。機械の中のレインじゃない。人間のレインだ…）あの温もりは、今でも忘れられない。

ニルトニアでプレイしていたレインだって、本物の人間がプレイしているってことは、分かってはいたけど、所詮機械の中のゲームのキャラは、生きている人間にあって当たり前な体温なんてなかった。

だけど、涼に抱きしめてもらったことで、レインが、本当にこの世に生きている人間だと、その人に巡り合えたのだと、僕はやっと信じていることができたのだ。

その嬉しさで、僕はまた泣いてしまったのだった。

そんなことを思い出していると、涼が心配そうな表情で、僕の顔を覗き込んできた。

「このところ、優って、なんかぼーっとしてること多いよね。なんか悩み事でもあるの？」

そんなことを突然聞かれた僕は、まさか涼に初めて抱きしめられたときの感覚を思い出していた、などと言えるはずもなく、真っ赤になっってしまった。

「べ、別に。何でもないよ。ちょっと、考え事してただけ」

「顔が真っ赤だけど…。あ、そっか。優はこの間太田さんとデートしてから、ずっとぼーっとしてるよね。彼女のこと考えてたんだー」

「ち、ちがつ、それはっ、だから違うって言っただろ」

（まだ、僕が太田さんのこと好きだって勘違いしたままだったのか…）

「ふふっ。そうやって慌てるとこが怪しいよね」

笑いながらからかう涼を、僕は恨めしげな目でにらんだ。

その時、僕は、気のせいかもしれないが、あることに気付いた。笑っているはずの、涼の顔が、少し悲しそうだったのだ。

## 第七章

その日、僕の予想もつかない大事件が起こった。始まりは、いつもと同じはずだった。

いつものように、放課後、サッカー部の練習に出て、いつものように、部活の仲間たちと汗を流した。

もちろん、その中には涼もいた。

どこまでも普段通りの、日常の一部だったはずだった。

部活が終わった後、後片付けの当番だった僕のために、涼と一緒に残って手伝ってくれた。

毎日一緒に帰っていた僕たちは、お互いの片付けの当番のときは、どちらかが一緒に残って手伝っていたから、これもやっぱりいつもと変わらないことだった。

後片付けもやっと終わり、さて帰ろうか、と部室の中を見渡しながら僕がそう思っていたとき、僕は突然、同じ部室にいた涼に、肩を抑えつけられた。

僕の背後には、部室の壁があって、僕は、涼に壁に両肩を押し付けられる格好になった。

「な、何するんだよ！ 涼」

僕は、突然涼が何をしだしたのか分からず、驚いて混乱した。

しかし、涼は、僕の問いかけには答えず、ただ真剣な眼差しで僕を見つめている。

何かただならぬ雰囲気、涼に、僕は少し怖くなった。

とりあえず、この訳のわからない状況から抜け出そうともがいてみたが、華奢な体躯からは、想像できないくらい涼の力は強く、僕は壁と涼の間に挟まれて、身動きがとれなくなってしまった。

「…優。僕、優のことが好きなんだ。優に好きな人がいると分かってても…どうしても、ダメなんだ…。僕は優が……」

「……！」

僕はその瞬間、心臓が飛び出るかと思うほど驚いた。  
呼吸すらもできなかつた。

なぜなら、涼が僕にキスをしてきたからだ。

(一体、今何が起こっているんだ…)

涼の柔らかい唇が、僕の唇と重なっている。

僕は、今起こっていることが信じられなくて、思考回路は完全に停止してしまっていた。

> i 3 1 4 1 4 — 3 4 3 9 <

だから、それは、長い、長い時間のように思われた。

それをやぶつたのは、ばさつと何か、物が落ちる大きな音だった。

はつとして、音のした方向に目をやると、部室の開け放たれた扉に、茫然と太田さんが立ちつくしている。

しかし、彼女はすぐに、落としたものを拾い集めて、その場から走り去っていった。

(やばい…よりもよって、こんなところを見られた！)

その瞬間、僕は全身の力を込めて、涼を突き飛ばしていた。

「なんてことするんだよつ。っていうか、何がしたいのか、全然分からない。涼は、僕をそんなふうに見てたのかよつ。最低だ、もう二度と……会いたくない」

僕も、気づくと、その場から逃げるように走り去っていた。

あとに、涼を残して。

\*\*\*

その日、家に帰ったあとは、ずっと、涼にキスされたことばかりを考えていた。

唇に、そつと手を当ててみる。

まだ、涼の唇が触れた温かくて柔らかい感触が残っていた。

(何で…何であんなことを…)  
僕はいつしか泣いていた。

涼は、僕のことを好きだと言っていたが、それは明らかに友情とかの好き、ではなくて…。

つまり、涼は、僕のことをそういう目でみていた、ということか。恋しているとか、恋人にしたいとか、キスしたいとか、もつといえ、その先の肉体的な関係も涼は望んでいて…。

僕はそこまで想像して、それらを打ち消すように頭をぶんぶん振った。

普通の男女だったら、そんな欲望も、誰もが持つ普通の感情だと受け入れられるだろう。

だけど、僕と涼は男同士なんだ。

(なのに……なんで、そんな風に、僕のことを見ていたんだよ…)  
これからどうすればいいかとか、涼への想いはこれからどう変わっていくのかとか、考えは尽きなかったが、どれも、どんなに考えても、答えは見つからなかったのだった。

\*\*\*

次の日、学校へ行くと、昼ごろには、もう僕と涼の噂が学校中に広まっていた。

誰が広めたのか、なんてことは、考えるまでもなく明白だ。

なぜなら、そのシーンを見ていたのは、ただ一人、太田さんだけだったからだ。

『藤崎君、きつと、好きな人いるよ』

そう悲しそうに言っていた彼女の想像はあたっていたのだ。

それも相手は、自分の恋の手助けをしてくれた僕で。

いや、手助けをした、なんて、今はもう思っていないだろう。

もしかしたら、二人はその時すでに両想いで、必死に片思いする太田さんの姿を、二人で笑って見ていた、とかそんな想像すらしてい

るのかもしれなかった。

それほどの悪意が感じられるほど、僕たちがキスをしていた、という噂が広まるのが早かったからだ。

まあ、僕の存在を知っている人は、この学校の中でも、そんなにいなかったが、藤崎涼は違う。

学校中の人気者で、何でもできて、優しくて、かつこよくて、女子の憧れの人。

そんな彼が、男の僕とキスをしていたなんて、まあ太田さんが悪意を持って噂を広めようとしなくなつて、あつという間に皆に知られてしまうことだったのだろう。

当然、渦中の僕は、普段話したこともないような人からも、質問攻めにあつた。

（おそらく、涼も同じ目に遭っているんだろう）

そう思ったが、いや、と僕は思い直した。

彼に直接聞ける勇氣のある人間は少ないかもしれない。

だから予想通り、質問は、ほとんど僕に向けられることとなった。

「なあ、高井君。あの藤崎君とキスしたって本当？」

興味津津、という顔つきで、僕の周りを、大勢の生徒たちが取り囲む。

いつもは、僕に話しかけてもこないのに、こんなときだけ、馴れ馴れしく話しかけてくるのだ。

（本当に、嫌になる）

僕は今日一日、いやもしかしたら事態の收拾がつくまでしばらくずっと、こんな目に遭わなければならないのかと思うと、自然ため息がこぼれた。

しかし、そんな様子を表にださないように、僕は平然と言いつた。

「本当だよ」

僕の答えに、周りが一瞬で、ざわざわとざわめく。

「何で？ 二人はそういう仲だったの？」

「何で？ 皆は思わないのかな？ 藤崎涼ってそこらにいる女の子

より、よっぽど綺麗だから、キスくらいしてみたってさ。思った通り、その辺の女の子とするより、ずっとよかったよ」

僕がにこにこ笑ってそう言うと、周りはシーンと静まり返った。

そしてそのあと、あちこちから、最低、とか、きもい、とか、藤崎君かわいそう、などと、怒りの声や、僕を蔑む声、藤崎涼への同情の声が聞こえてきた。

(これでいい)

質問攻めに遭っている僕が、こう言っておけば、藤崎涼は、無理やり僕にキスされた、という噂が広がり、彼がホモだとか蔑まされることはないだろう。

大体、僕がもし本当のことを言ったとしたって、誰がそんなことを信じるだろう？

あの藤崎涼が、男にキスをした、だなんて。

もし仮にそれが真実として広まったとしても……それはそれで嫌だ。僕のかげがえのない人である涼を、誰が蔑むことも

僕は許さない。

## 第八章

涼にキスされた次の日から、1週間くらいの間、僕は大勢の人たちから質問攻めに遭って、そのたびに同じようなことを答えた。

すると、自然と僕の周囲から、人が消えていった。

クラス内でも、数は少なかったが、仲良くしゃべっていた友達も、僕を避けるようになった。

それだけではない。

廊下を歩けば、男女問わず、僕を避けるようにして、皆が歩く。

彼らは、僕を無視するだけではなかった。

視界にいれることすらしなかった。

(なんか、あの頃に戻ったみたいだな…)

そんな周囲の中にいると、ふと、中学校で浮いていたため、ニルトニアに現実逃避していたあの頃の僕が思い出される。

(いや、あの頃より酷いか…)

あの頃は、僕はただの空気のような存在だったけど、今は明らかに皆に嫌われている。

まあ、どっちにしても、一人になったことには変わらない訳で。

だから、僕は全然気にしていなかった。

あの頃は、そんな毎日が普通だった。

だから、毎日のように、ニルトニアに逃げ込んで、必死に自分の居場所を作っていた。

(また、ニルトニアにでも逃げ込むか?)

僕は、そう考えて、ふっとおかしくなり一人笑った。

そんな想像をしながら歩いていると、廊下の真ん中で、バツタリと涼と出くわした。

涼と会うのは、そういえば、あの事件の後以来だった。

あの日から僕は、朝と帰りの通学も一人でしていたし、サッカー部に行くのもやめた。

彼との関わりを、一切断っていたのだ。

僕は、約1週間ぶりに見る涼の顔を、不思議な思いで見つめていた。あの時は、涼のしたことが、許せない、というか、不可解というか、怒りに任せて、「最低だ」とか言ってしまったが、何故そんなことをしたのかという、本当の彼の気持ちを聞いた訳ではない。

本当の気持ちを聞けば、僕の納得できる答えが返ってくるのかも知れないし、今までの大切な時間を、その涼がしたたつたひとつの行為だけで、涼の全てを否定してしまったのは、あまりに早計だったし、狭量だった。

ひどいことを、言ってしまった。

僕が、心の中でそんな反省をしているなんて知らないであろう涼は、僕に詰め寄ってきた。

「なんで、優はそんな嘘をつくんだ！ 本当は違うじゃないか。僕の方が無理やり……」

「あんなことされたのに、まだ僕に近づいてくるなんて、ほんとに藤崎君って人がいいんだね。でも、そんな君の人の良さにつけこんで、僕はもつと酷いこと、するかもよ？ もう僕には、近づかない方がいいんじゃないかな。僕も、自分を制御できる自信なんて、ないからね」

にこにこ笑いながら僕がそういうと、そのとき周りにいた幾人かは、啞然とした。

「そ、そうだよっ。藤崎君、もうあんなヤツに近づかないでっ」

「これ以上、関わるともつと酷い目に遭わされるよっ」

周囲の人間は、一生懸命藤崎涼に忠告し始めた。

しかし、涼は、それらを振り切って僕を追いかけた。

(…いけない！ ここで色々話をしたら、今までの全てが無駄になる)

僕は必死で、学校の屋上まで走って逃げた。

やっと、屋上の手すりまでたどり着いたところで、僕は息を切らせながら、後を追ってきていた涼を振り返った。

「なんでっ…なんで、優があんな嘘を！」

同じく息を切らせながら、涼は僕をまつすぐ見据えてそう言った。

「涼には借りがある。それを返しただけ」

「借り？」

「僕が一人現実はずまらないって、ニルトニアに逃避してたとき、  
現実引き込んで楽しく過ごさせてくれたでしょ」

「…そんなの借りなんて…。大体、今優はまた一人ぼっちになって  
しまったじゃないか！ そんなの…借りとか…。僕のせいじゃ  
涼は、気づくと肩を震わせて泣いていた。」

それを見て、僕はあの日のことを思い出していた。

そう、あの日も、中学の屋上で泣いていたんだ。

泣いていたのは僕の方だったけど。

僕は、泣いている涼を、あの日、涼が僕にそうしてくれたように、  
優しく抱きしめた。

僕より背の高い涼を抱きしめるために、少し背伸びをして。

(ああ、温かい)

僕の大好きな涼の温もりが伝わってくる。

「正直、どうして涼が僕にあんなことをしたのか分からない。だけ  
ど、こつやつて涼と抱き合うのは、僕も好きだ。涼の温もりを感じ  
ると、嬉しくなる。…まあ、だけど、キスしたいとは思わないけど  
ね。だから、どうしてあんなことをしたのか、涼は僕のことをどう  
思っているのか、ちゃんと聞きたい」

僕の腕の中で泣く涼は、僕より背が高いはずなのに、随分小さく見  
えた。

それはまるで、小さな少女のようだった。

「優…、まず、ちゃんと謝りたかった。どんな理由があつたにしろ、  
無理矢理優にキスしたことは…本当に悪いことをしたって思ってる。  
謝っても許してもらえないかもしれないけど…、それでもごめん  
どうしてあんなことしてしまったかは…僕も…実はよく分からない  
んだ。優に好きな人がいるって知った時、ものすごくショックで、

その時、自分は優のことが好きなんじゃないかって思った。もちろん、親友だから、好きなのは当たり前なんだけど、そういう気持ちじゃなくて、恋人にしたいとか、そういう気持ちなのかって。どんなに考えても分からなかったから、試してみたくなったんだ…。キスしたら、どんな気持ちになるんだろう…。って」

「そしたら、どうだったの？」

僕が聞くと、涼は泣くのをやめて、ぱつが悪そうに笑った。

「何にも感じなかった」

「そっか」

「それで、僕なりにそのあと一生懸命考えてみたんだけど、優は、友人でも恋人でもなく、ただ大切な人なんだって思ったんだ。

そんな定義、この世にはないと思うけど。

僕にとつて、失いたくない人、かけがえのないひと、隣で笑っていて欲しい人、他に代わりなんてどこにもいない人。そんな人が別に女の人じゃなかったって、別に僕はいいし、だからといって、普通の男女が望むようなことは、優には望まないよ。

ただ、ずっと一緒にいたい。僕にとつて優は特別だから。最初から

ニルトニアで出会った日から、ずっと特別なんだ」

「そっか。それなら僕も同じだ。僕にとつても、涼は特別な人。それなら、お互い一緒にいたいから、よかったよ。

まあ、涼に、僕の体が目的だ、とか言われたらどうしようかと思っただけど」

僕はそう言つて、堪え切れずに大笑いした。

「そ、そんな訳ないでしょっ。大体そんな大笑いしなくなつていいじゃない。これでも僕は、すっごく悩んだんだからねっ」

大笑いする僕を、涼はうらめしそうににらんだ。

「ああ、ごめん、ごめん。嘘だつてば。僕だつてあんなことされて、そりゃあ悩んだんだからさ。

ああ、それから、ひとつ言っておくけど、僕に好きな人なんていないからね。涼は勝手に僕が太田さんのこと、好きだつてずっと勘違

いしてたでしょ。今だから言うけど、太田さんが涼のことを好きだったの。だから、頼まれて3人で遊園地に行った。それだけ」

僕の話聞いた涼は、ものすごく驚いていた。

「そうだったの…？ 僕、てっきり…」

そのあまりの驚きように、僕は、まだそう思い込んでいたのか…と呆れるしかなかった。

「…涼って頭はめちゃくちゃいい癖に、そういうとこ全然分らないよね。おまけに、思い込むと突っ走るし…」

僕は思いつきりため息をついた。

まあ、完璧な人間なんているわけないのだから、これが藤崎涼の欠点、なのかもしれない。

## 第九章

「これからどうしようか…?」

涼しい秋の風に吹かれながら、僕と涼は並んで屋上に座っていた。

涼の言った、これから、というのは、この後すぐ、という意味だったかもしれない。

だけど僕は、ずっと考えていたことを涼に話し始めた。

「前さ、進路希望用紙を白紙で出して、先生に呼び出されたことあったでしょ。その時、夢とか考えたことないの? って先生に言われて…。その時は、夢なんて考えても仕方ないって思ったんだけど、最近、少し考えてみて、僕、やりたいこと見つけたよ」

涼は少しびっくりして、僕を見つめた。

「やりたいことって?」

「うん…。涼と出会えたのは、ニルトニアのおかげだから。僕たちみたいに、かけがえのない出会いをする人が、またニルトニアで出てくるかもしれないよね? そのためのために、僕は新しいニルトニアを作りたいんだ。まあ、要は、ゲームを創りたいってことなんだけど。」

ただ、一口にゲームクリエイターと言っても、色々職種が別れていてね、プランナー、プログラマー、シナリオライター、キャラデザイナー、とかたくさんあるんだ。

シナリオライターとキャラデザイナーは無理そうだから、僕はプログラマーを目指そうと思う。

それで、色々なる方法も調べただけど、ニルトニアを作っていたチェリプロが、専属のゲームクリエイター養成専門学校を作ってるらしくて、そこへ行って勉強すれば、そのままチェリプロに就職できるかもしれない。

もちろん、生徒の大部分が、振り落とされるんだろうけど。でも、頑張ってみたいんだ」

僕が、将来の夢を語っている間、涼は熱心に僕の話に耳を傾けていた。

そして、そんな僕を嬉しそうに見ていた。

「…新しいニルトニアを創る、か。それ、すごくいいね！ プレイヤーとしてもおもしろかったけど、創る側になったら、もっとおもしろそうだな。僕も、優と一緒に、新しいニルトニアを創ってみたいな」

僕の夢を聞いた藤崎涼は、その時、僕と同じ夢を、自分の夢として思い描いたようだった。

そう感じたのは、一緒にニルトニアを創ってみたい、という藤崎涼の顔が、とても輝いていて、嬉しそうだったからだ。

僕は、藤崎涼が僕と同じ気持ちになってくれたことが、ただ嬉しかった。

いつもの、同じ高校に行きたい、とか、行きも帰りも一緒に帰りたいたい、とか、そういうのではなく、僕がやりたいと思ったことに共感して、同じ思いを抱いてくれた藤崎涼の存在を、ただ、嬉しく思ったのだった。

だから、僕は、くすりと笑って、藤崎涼を見た。

「そしたら、また、レインに会えるわけだね」

「シオンにもね」

僕たちは、二人で見つめ合って、しばらくの間笑い合った。

まだ高校生の僕たちの夢は、始まったばかりで、この先どうなるかなんて分からない。

だけど、涼となら、なんだってやれてしまいそうな気がするのだった。

## 第十章

その日の放課後、まだ学校にたくさん生徒が残っている中、僕はそくさと一人帰る準備をしていた。

今までは、涼と一緒に待ち合わせて、帰宅していたのだが、今はもうそんな必要もない。

今、僕と行動を共にする、ということとは、涼まで僕と同じ目に遭ってしまふということだからだ。

だから、ここ最近では、授業が終わると、僕はすぐに家に帰るようにしていた。

(よし、帰ろう)

準備を終えて、鞆を持って、僕はいつものように、クラスメートに避けられながら、教室を出た。

出ですぐに、僕は驚いた。

なぜなら、そこに涼が待っていたからだ。

(なんでこんなところに来るんだよ)

僕は、涼にそんな視線を向けた後、改めて周囲を見渡した。

まだ、学校は終わったばかりで、たくさんの生徒が、そこらじゅうにいる。

(まずい…。どう切り抜ける?)

僕がそんな思いに頭を巡らせていると、突然涼が他の生徒たちの目の前で、僕を抱きしめた。

(……は?)

何やってるんだ、お前は!

と、即座につっこんで、離れたかったが、涼は僕より背も高く、力も強いので、あのときのように、どんなに抗おうとしても、それは無駄な努力なのだった。

「みんな誤解してるみたいだから言っておくけど、キスをしたのは優じゃなくて、僕なんだよ。こうやって見てもらえば分かる通り、

優は僕より小柄で華奢だから、当然力だつて僕より弱い。そんな優が、僕に無理やりキスするなんて、物理的に無理なんだ。現に今だつて、優は無抵抗に見えるだろう。あの時も 僕が優に

キスしたときも、こんなふうに、優は無抵抗だつたんだ」

涼の爆弾発言に、そこにいた人全員が固まった。

確かに、どんな言葉を重ねるよりも、実際に僕を強く抱きしめて、動けないようにしてしまう方が、よっぽど説得力があつた。

だからつて、わざわざそんなことする必要などないのに。

他人に避けられたり、無視されたり、バカにされたり、蔑まれたりするのなんて、僕一人で十分だつたんだ。

涼がそんなふうにされるところなんて、僕は見たくなかったのに……。

(涼のバカっ)

僕がそんなことを思っていることも知らないで、涼はとどめの一言を、僕に囁いた。

「愛してる、優」

(な、なんてこと言うんだ

！)

もう、涼はこれで、ゲイとかホモというか、そついつふうに思われること決定じゃないか。

僕が、茫然と涼を見ていると、涼が誰にも気づかれないように、僕にこつそり耳打ちしてきた。

「優、今から力を緩めるから、その隙に、何か適当なことをいって、僕を突き飛ばして逃げて」

(……え！？ な、なに、言ってるんだ?)

僕は、涼の耳打ちしてきた意味を理解するのに、一瞬時間がかかった。

でも、すぐに、僕は理解した。

つまり涼は、僕に無理やりキスをしたことを、皆の前で証明してみせて、それを、僕が拒否して涼を突き放すところまで見せて、あの日の真実を再現しようとしているのだ。

だけど、それじゃあ、今度は完全に涼が、最低な人と見られることは間違いない、僕がこれまでしてきたことは、一切の無駄になっ  
てしまう。

いや、そんなことよりも、そんなことよりも……。

(そんなこと、できるわけねーだろっ!!! くっそー。しょーが  
ねー! こうなったら僕も付き合っしかないじゃないか)

涼の言った通り、涼が僕を抱きしめていた力はすぐに解かれたが、  
僕は、覚悟を決めて、涼に抱かれたまま、真っ直ぐ涼を見つめた。

「僕も愛してる、涼」

言った瞬間、僕は顔から火が噴き出そうなくらいの恥ずかしさがこ  
みあげてくるのを感じた。

> i 3 1 9 8 2 — 3 4 3 9 <

だけど、こうなった以上仕方がない。

涼だけを変態扱いさせられない。

(もう、一蓮托生だ!!!)

涼は、僕の言葉を聞くと、ものすごく驚いていたようだったが、す  
ぐ嬉しそうに笑った。

涼は以前、僕のことを、大胆だ、と笑っていたが、涼の方がよっぽ  
ど大胆なのだ。

\*\*\*

翌日の通学途中の電車の中で、僕は、だらーんとつり革にぶらさが  
りながら、うなだれていた。

「すっかりつかまってないと、また転びそうになるよ」

隣で、涼が僕に囁いてくる。

「…よく、そんな冷静でいられるよね。昨日の涼のアレのせいで、  
今日から僕たち、もれなくホモカップルだよ? どうせ噂なんてす

ぐ広まるに決まってるから、僕たち、学校中から浮きまくりだよ？  
当然避けられるだろうし、無視だってされるし、差別的に見られ  
たり、酷いことされるかもなんだよ？」

「そうだねー。まさか、優まで僕の芝居に乗ってきてくれるとは思  
わなかったから、ほんとに、ホモカップルって思われちゃうねー」  
涼は、事の重大さを理解していないのか、楽しそうに笑った。

「笑ってる場合じゃないよ！ ……あーもお、ほんとどうなっても知  
らないんだから」

僕は、これからの学校生活を思うと、自然とため息がでてきた。

「僕は、別に、学校中の誰から嫌われたっていいよ。…優さえいて  
くれたら、それでいい」

「そんなこと言うから、余計誤解されるんだよ。学校ではもうそ  
んなこと言ったらダメだからね！」

僕は、むくれて見せながら、内心はとても嬉しかった。

僕一人、学校から浮けばいい、涼はそのまま何もなかったように、  
他の皆と付き合えばいい。

そう思っていたのは、僕の独りよがりだったのかもしれない。

僕が、学校中から浮く涼の姿を見るのが辛いように、涼だって、そ  
んな僕を見ているのが辛かったのだろう。

だから、僕は、心の中で、そつと涼に付け加えた。

（僕だって、学校中の誰が相手にしてくれなかったって、涼さえいて  
くれるならそれでいいんだ）

## 第十一章

意を決して、学校に入っていくと、予想通り、クラスメートが、僕を遠巻きにして、何やらひそひそ言っている。予想通りの展開だ。

(望むところだ。こっちは一人ぼっち歴長いんだからなっ。そうそうたやすくへこむかってんだ)

などと、なんの自慢にもならないことを、自信満々に思いながら、その日一日が過ぎていった。

放課後になり、さて帰ろう、と教室をでると、そこには涼が笑顔で待っていた。

(涼は今日一日どうだったのかな…)

僕が心配そうに涼の顔を見つめっていると、突然、僕たちの周りでフラッシュが何回も光った。

何事だろう？ と周りを見渡してみると、ある女の子の集団が、携帯のカメラで僕たちの姿を勝手に撮ったらしいのだった。

(くっ…。こっという嫌がらせにできたか)

僕が写真を撮った女の子たちを睨みつけると、彼女たちは慌てて謝ったり、両手をぶんぶん振って誤解だ、と言いだした。

(……ん?)

頭にたくさん？マークをとばしながら、僕と涼は、彼女たちに引張られて、ほとんど強引に教室のなかに戻された。

「勝手に写真撮ったのは、ゴメン！ でも、悪気があったわけじゃないの。私たちBL専門の同人誌を描いてる仲間たちなんだけど、今度の同人で、藤崎君と高井君をモデルにオリジナルBL同人を描こうかと思つて。それで、参考資料のために、写真を撮らせてもらったの。最初はちゃんと断ってから撮るつもりだったんだけど、二人があまりにいい表情とアングルで一緒にいたから…」

「は、はあ…そうですか」

僕は、何が何やら訳がわからなかったもので、とりあえず相槌を打った。

「どうやら、イタズラや冷やかしなどではなかったらしい。」

「BLって何？」

涼の質問に、彼女たちはお互いを見つめあって笑いだした。

「ボーイズラブのことですよ。略してBL。中身は、説明しなくても、お二人さんの方がよく知ってると思うけどね。」

そう言っつて、また彼女たちはクスクスと笑った。

（ボーイズラブって…やっぱり…そう誤解されてるよね…）

がつくりとうなだれた僕の様子など、気にもとめていない様子で、彼女たちは、話を続けた。

「で、ですね、色々お二人に取材とかしちゃってもいいですかあ？」

「なあんで、取材、なんて建前たてて、実際のBL体験とか聞きたいだけだったりするんだけどね。」

「ちよつとお、そんなこと言ったら取材に協力してくれなくなっちゃうじゃない！」

「だってえ、まさか、学校で一番女子にモテる藤崎君が、まさかの男の子好きだったなんて、ちょー意外だし、でも、言われてみるとハマってるじゃん。高井君だって、藤崎君より少し小柄なところか、童顔なことか、相手役にぴったりって感じだし！」

彼女たちは、興奮冷めやらぬ様子で、キヤーキヤー騒いでいた。

僕と涼は顔を見合わせて、この不思議な展開に戸惑っていた。

そんな僕たちを全く気にせず、彼女たちは話をどんどん続けた。

「それでっ、ぶっちゃけ、どっちが受けなんですかあ？」

「そんなのー、聞かなくても分かるじゃない。高井君に決まってるでしょ。ねっ、高井君？ そーだよねっ。」

「は、はあ、まあ、そうかな…。」

（受けってなんだ？）

僕はそう思いながらも、何だかあまり深入りしたくなかったので、あいまいに返事をした。

「やっぱりー！ キヤー、これはだんぜんいいの描ける気がしてきたねっ」

「そりゃいいの描けるよお。こんなにいいモデルがいるんだから」  
いつまでもはしゃぎ続ける彼女たちに、僕は少し疲れを覚え始めた。

「あの…そろそろ帰ってもいいかな？」

僕は、できるだけ愛想よく笑いながら、言った。

「残念。でも、けっこういい取材できたから、ありがとー。また、協力お願いしますねっ」

まだ、色々話を聞きたそうな彼女たちをおいて、僕と涼は家路についた。

## 第十二章

僕と涼は、あの一件で、てっきり学校中から浮き、差別的な目で見られたり、阻害されたり、意地悪をされたりするものだと思い込んでいたのだが、なぜかそれは起こらなかつた。

いや、むしろ、僕たちは、学校で知らない人がいないくらい有名になっただけで、それも悪名ではなく、なぜか人気者扱いを受けていた。といっても、それは男子からではなく、大勢の女子たちからだったけど。

僕と涼が並んで歩いていたり、一緒に笑いながら会話をしていると、女子の集団が僕たちを遠巻きにして、キヤーキヤー騒いでいるなどということが、この頃よくあるのだ。

僕と涼は完全に男同土カップルだと思われているはずなのに、なぜ女子に人気ができるのか、僕はさっぱり分からなかつた。

「女の子って分からないね…」

「うん…」

そんなことを涼と言いつつあったある日、すごい事件が起きた。

僕たちの学校には、新聞部があり、そこが毎月学校新聞を作っていたのだが、その日発表された新聞の一面に、僕たちが見つめ合っている写真が大きく掲載されていたのだ。

それは、確か前に、女の子たちの集団に、突然撮られた写真だった。「ぶっ」

僕は、それを見た瞬間ふいた。

見出しには、「熱愛、美少年B.Lカップル」と、堂々と書かれている。

そして、記事の続きを見ると、さらに僕は驚いた。

その写真を撮った彼女たちが描いた、同人誌の一部も掲載されていたのだ。

それは、僕と涼と一緒にベッドに添い寝している絵だった。

「ちよ、ちよつと、何だよ、これっ。涼、見てよ!」

僕に新聞をおしつけられた涼は、しばらく無言で新聞を見ていた。そしてそのあと、大笑いしだした。

「おもしろいね、これ」

「いやいや、おもしろいとか笑ってる場合じゃないから。これ学校中に配られてるんだよ? 僕たちさらしものじゃないか!」

実際、これまでの新聞部が書いた新聞は、校内の片隅の掲示板に小さく張られていただけだったのに、今回の号は、学校中にばらまかれ、読まない人はいない、というくらいにまで、広まっていた。

それほどまでに、僕たちは有名なBLカップルになっていたらしく、女子の間では、ファンクラブまであるとか、ないとか。

誰にも興味を持たれないままの学校生活もつまらなかつたけど、こんなにも興味を持たれて、学校中の有名人になってしまうのも、それはそれで困つたと、僕は考え込んだ。

別にそれが、本当に良い意味だけの有名人だったらよかつたのだろうが、美少年BLカップル、とか言われて、周囲の注目を浴びても……全然嬉しくない。

というか、かなり落ち込む。

僕は大きいため息をついた。

「あーあ、あと、高校1年間、どうやって過ごせばいいんだ、僕は

……

「……こうやって」

そう言つて、涼は僕を背後から急に抱きしめた。

> i 3 2 1 4 6 — 3 4 3 9 <

「ちよ、だからっ、そーいうことするなって。そんなことしたら、また誤解され……」

僕の言葉は、いつの間にか周りに集まっていた、女の子たちの黄色い歓声にかき消された。

帰り道、ずっとむくれたままの僕に、涼は何度も僕の機嫌をとってきた。

「…はあ。もういいよ。済んだことだし…。これからはやめてよね」  
「でも、優は僕とハグするの、好きなんでしょ？」

「……………」  
僕は、言葉に詰まって、真っ赤になった。  
それは…確かに好きだ。

ラインがずっと機械の向こう側の無機質な人間だったのを、本当に実在している人間なのだと理解できたのは、涼に抱きしめられて、その温もりを感じた時だった。

だから、それから、涼に抱きしめられると、僕はとても幸せな気持ちになる。

涼の存在を、一番近くに感じられる。

「…すっ、好きだけど……………。だけどっ……………」

赤面した顔を見られないように、顔を横に向けながら僕は言った。

「じゃあ、ハグは二人きりのときにしよう」

そろそろと振り返って、涼の顔を見ると、彼は優しくほほ笑んでいた。

その笑顔を見た後、僕はうつむいた。

(僕は、幸せ者だな…)

「あのね…この前の、将来の夢の話のことなんだけど、僕、東大の理学部を受けようと思うんだ」

突然、話題を変えて、そんな話をしだした涼に驚いて、僕は涼を見つめた。

「えっ？」

「色々調べただけど、優の目指すプログラマーは、確かに専門学校へ行った方がいいみたいなんだけど、僕はプランナーになりたく

て。プランナーだと、クリエイターの専門学校へ行くより、少しでも有名な大学を卒業した方がいいみたいなんだ。

だから、高校を卒業したら、優とは離れ離れになる」「真剣な眼差しでそう告げる涼を見て、僕は急に悲しくて寂しい思いが、どつと胸にあふれてきた。

思えば…いつもいっつも僕と同じ道を歩みたがる涼が、自分から僕と違う道へ進もうとするのは、これが初めてのことだ。

一緒にいて当たり前前、それを勘違いして、僕は昔、やめてくれと怒った。

なのに…なんて、僕は自分勝手なのだろう。

今、僕から離れていこうとする涼の言葉が、とても悲しい。

「そんな寂しそうな顔しないでよ、優。僕たちは確かに4年間、離れ離れになるかもしれないけど、その間に一生懸命勉強して、絶対また4年後に会おう。」

チェリブロでゲームクリエイターとして」

「…うん、そうだね。分かったよ。僕も4年後にまた一緒に働けるように、絶対プログラマーになるから」

寂しさをこらえて、僕は涼を見上げて笑った。

その瞬間、涼は僕を強く抱きしめた。

「…離れていても、僕は優のそばにいる。もし優に何かあったら、いつでも駆けつける。…大好きだ」

「バカ…。ハグは二人きりの時だって言ったのに…」

そう言いながら、僕は泣いていた。

## 第十三章

ある日の学校の帰り道、僕と涼は、ちよつと立ち読みでもしていこうかと、駅前の大きな本屋に立ち寄った。

これくらい大きな本屋であれば、立ち読みしていても、店員に追い返されたりすることはない。

だから、僕と涼は、時々この駅前の大きな本屋に立ち読みに来ていた。

もちろん、いつも立ち読み目当てで来ていた訳ではなく、気に入った本はちゃんと買っていったことだってある。

そんなふうにいるもの本屋で、僕は手に取った一冊の雑誌を見ながら、思わずため息をついていた。

横で別の本を読んでいた藤崎涼がそれに気づいて、僕の読んでいた雑誌を覗き込んできた。

「一年一回の大ゲームショー……？」

僕の読んでいた雑誌の開いていたページに、でかでかと書かれていたタイトルを、涼は読みあげた。

「行ってみたいよな！。将来ゲームクリエイター目指すなら、勉強になる、とまではいかなくても、絶対モチベーションあがるもん……。今、どんなゲームが創られているのかとか、僕、すっかり分からないしさ……」

そう言つて、僕は再びため息をついた。

「じゃあ、一緒に行こうよ。僕も興味あるから、行ってみたいな」  
にこにここと笑う涼を、僕は呆れた眼差しで見返した。

「あのさ、そんな簡単に言うけど、これ、東京でしかやってないんだよ？　ここから東京まで新幹線とか乗らなきゃいけないし、他にも移動時間考えたら、行くだけで半日以上かかっちゃって、肝心のゲームショー見れないだろ。一日しかやってないんだからさ」

「ふうん。そうなんだ……」

そう言つて涼はしばらく考え込んでいた。

そして、急に何か思いついたのか、満面の笑みで僕を見た。

「じゃあ、泊まりで行けばいいんじゃない？ えっと…ゲームショーの日は日曜日だね？ それじゃあ土曜日に行つて、東京で一泊してから、次の日曜にゲームショー見て、それで帰つてこればいいでしょ？」

「は！？ 何言つてんの？ 泊まりつて…、旅行に行くつてこと！？」

相変わらず、突拍子もないことを、あつけらかんと言いだす涼に、僕は面喰つた。

「うん。…そうか、旅行つてことになるのかな。ちょうど土日なら学校も休みだし、行こうよ！ 優」  
嬉しそうに言う涼に、僕は、がっくりとうなだれた。

「男二人つきりで旅行とか、なんかおかしいだろ…。しかも、ホテルとか泊まるとき、絶対怪しい目で見られる気がする…。」

いや、変なことじゃないのは分かつてるんだけど、最近もうなんか学校でそういう目で見られてないから、周りの人全てにそう思われる気がする…。」

僕が、毎日学校でそういう目ばかり見られていることを思い出して、憂鬱な気分になって、落ち込むと、また涼は考え込んだ。

「うーん。男二人つきりが、嫌な訳だね…。」

…あ！ じゃあさ、優が女装して行けばいいんじゃない？ そしたら、普通のカップルに見えるよ！」

またも、すごくいいことを思いついた、とでも言いたげな、嬉しそうに言う涼に僕は驚いて呆れた。

「いやいやいや、それ、もっとおかしいからっ！ 余計ややこしいことになつてるから！！」

大体何で、僕の方が女装しなきゃいけないんだよっ。するなら、自分かしろよっ」

僕の呆れかえつた突っ込みにも、涼は、真剣に考えているようだった

た。

「うーん。でも、身長からいくと、優より10センチ以上背が高い僕が女装するのは、無理があると思うんだよね。それに何より、僕より優が女装した方が、絶対かわいいから」

確信に満ちた表情で、にこにここと笑う涼に、僕は言い返す気力もそがれていった。

「確かに、男二人っきりの旅行も嫌だけど…、女装して旅行するのも、それ以上に嫌だ…。なんか、自分の大切なものを失う気がする……」

(いや、気じゃなくて、ほんとに失うな。…男としての自分を)

「でも、優は、どうしてもこのイベント、行きたいんでしょ？ それなら、周りにどう思われようがいいじゃない。」

それに…：優が女装していけば、別に二人っきりじゃなくても、いつでもハグできるから…：僕は嬉しいんだけどな……」

少し照れたように涼が言うので、僕まで顔が真っ赤になってしまった。

確かに涼の言う通り、本当に行きたいのなら、周りにどう思われたっていいのかもしれない。

それに…：涼と、誰に気兼ねすることなく、いつでもハグできる、と言う涼の提案には、僕は、情けなくも、ものすごく魅力を感じてしまっ、それならいいかな、と、つい思ってしまったのだった。

## 第十四章

ゲームショーの前日の土曜日の朝9時頃、涼は僕の家に来てきた。「女装するっていったって、もちろんそんなのしたことないんだから、どうやってしたらいいかとか、全然分かんないからね」

と、前もって言うてあった僕に、大丈夫、そこは任せて、と涼が自信満々に笑って言うので、当日まで僕は、何も聞かされていなかった。

だから、もしかしたら、女装なんてばかげたことは諦めて、普通に男二人っきりの旅行になるのか、と僕は思っていた。

しかし

僕の家に来てきた涼は、女物の服やアクセサリー、果ては化粧道具やカツラまで、ばつちり持参してきていた。

僕はそれらを茫然と見渡しながら、涼に聞いた。

「…ねえ、これ、なんでこんなの涼が持つてるの？ っていうか、そついう趣味があつたの？」

そつおそるおそる尋ねた僕に、涼は困つたように笑つた。

「違つよー。姉に借りてきたんだよ。今、大学生なんだけど、身長や体格がちょうど優と同じくらいだったから、お願いして借りてきた。ああ、カツラは、行きつけの美容院の、なじみの店員さんに貸してもらつただけだね」

「あ、ああ、そーなんだ。涼つてお姉さんいたんだ……」

(いや、ここで言うべきことは、そんなことじゃないだろっ)

僕の頭は完全に混乱していた。

そんな僕を、涼は急かした。

「そんなことより、早く始めようか。じゃないと、電車に乗り遅れちゃうよ?」

そう言つて、僕に女の子の服を着せて、アクセサリーをつけ、メイクもばつちりして、最後に、肩より少し長いくらいのロングヘアの

カツラをつけて…、と、その一連の作業を、涼はてきぱきとこなしていった。

涼はもとも何でも器用にこなすから、こういう慣れない作業でも、なんてこともないように、軽くこなしてしまう。

そして、完全女装した僕を見て、涼は、最初驚いて、その後目を細めた。

「すごくかわいいよ、優。ほら、鏡で見てみなよ」

全然見なくなかったが、というかできれば自分の女装姿なんて、一生見なくなかったが、一体どんなふうにされたのか気になったので、僕はドキドキしながら、大きな姿鏡の前に立った。

そこに映っていたのは、もう男でも何でもなく、どこからどう見ても完璧に、女の子、だった。

(よ、喜んでいいのか…、悲しんでいいのか…)

僕はがつくりと、鏡の前でうなだれた。

「最初から、優は女の子の格好似会うつて思ってたけど、予想以上だったかな…。僕がこれまで会った女の子の中で、一番かわいいよ。僕の複雑な心境とは裏腹に、涼は、僕を見てもものすごく喜んでいて…全然嬉しくないんだけど。」

「…っていうか、このフリフリした、いかにも女の子、っていう服はどうなんだよ!? 何もこんな服じゃなくなつて、もっと地味な服でも良かっただろっ」

僕の抗議に、涼はまた困つたような笑い顔をした。

「それは仕方ないよ。僕の姉の趣味なんだから。貸してもらっている以上、文句は言えないでしょ?」

しかも、そのかわいらしい女の子の服に、ぴったり合っているアクセサリーや、どこで身につけたんだ、と思わず突っ込みたくなるほど、上手なメイクは、余計に僕を女の子以外の何者でもなくしていた。

(今更ながらに、涼の美的センスと、何でもこなせる器用さが恨めしい…)

鏡に映っている自分を受け入れることに、ものすごい抵抗を感じていて、複雑な感情が渦巻いていた僕を、急に涼が引つ張った。「優！ 結構時間が経っちゃってる！ 急いで駅に向かおう！」腕時計を見た後、すぐに涼は僕の手をつかんで部屋から走って出た。僕は、慌てて、近くに置いてあった旅行バッグをつかむと、涼の後に続いて、部屋を飛び出した。

## 第十五章

なんとか時間通りに駅について、涼と二人で電車を待っていると、僕はなんだか、周囲からものすごく視線を感じた。

女装しているせいで、神経過敏になっているのか、と最初は思ったのだが、どうやらそうでもなく、本当に、周りが僕のことを見ていた。

「涼、なんか、僕、すごい周りから見られてるんだけど。やっぱり、男だつてバレてるんじゃない？ おかしいんじゃない？」

僕はものすごく不安になって、こっそり涼に耳打ちした。そうすると、涼は僕を見て笑った。

「違うよ。みんな、優があまりにかわいいから、見ているだけだよ」「…え、そうなの？」

僕は、涼の言ったことに半信半疑だったが、実際は、涼の言ったこととは、半分当たっていた。

半分当たっていた、というのは、涼はもともと、稀に見る美少年で、その隣にまた、完全美少女武装した僕がいたから、だった。

つまりは、超美少年 & 超美少女カップルだったので、目立ち過ぎて、周囲の注目を集めてしまっていたのである。

そんなことに、全然思い当たらなかった僕は、涼にどんなに、大丈夫、と言われても、ずっと自分の姿がどう見られているのか、不安で仕方がなかった。

そんなことを思っている時に、ホームに電車が来た。

\*\*\*

「優、起きて。着いたよ、東京」

「……ん」

涼に優しく揺さぶられて、僕はゆっくりと目を覚ました。

起きてすぐは頭がまだぼーっとしていたが、涼の肩にもたれかかって眠っていたことに気づくと、僕は慌てて涼の肩から起き上がった。「ごっつ、ごめん、涼。僕、いつの間に寝ちゃったんだろ……」

「謝らなくてもいいよ。優の寝顔見てるの、よかったよ。かわいかったから、ずっと見ていたくらいだった」

穏やかに微笑む涼に、僕は恥ずかしくなってうつむいた。

「そんなの見てないで、起こしてくれればよかったのに……」

そう言いながら、僕と涼は東京駅に出た。

東京は中学校の時の修学旅行以来だったが、相変わらずすごい人だった。

前に来た時も思ったが、あまりの人の多さに、すぐに誰かにぶつかってしまいそうになって、歩くのにも気を使わないといけない。

(まるで、おのぼりさんだな……)

僕は、前来た時と同じことを考えていた。

でも前とひとつだけ違ったのは、

もし、チェリプロで働けるようになったら、いずれはこの東京で暮らしていかなければならないんだ。

この街が、僕の住む街になる。

そうなれるよう、僕は頑張りたい、同時にそう強く思ったことだった。

そんなことを考えていた僕に、涼が声をかけた。

「ホテルのチェックインまでまだ、少し時間があるから、どこか行ってみる？」

「あ、うん、そうだね。せっかく東京まで来たんだし、ゲームショー以外にも行けるとこあるなら、行ってみようか」

「優は、どこか行きたいところある？」

「んー、特にないかなあ。今日は、ゲームショー見に来ることしか、考えてなかったから」

「じゃあさ、スカイツリー見に行かない？ まだ完成してないけど、一度見てみたかったんだ」

涼が、楽しそうに言うので僕はうなずいた。

「いいよ。じゃあ行こうか」

僕がそう言うと、涼はありがとう、と嬉しそうに笑った。

また電車に乗って、スカイツリーを間近で見られる見学場所まで来た僕は、その高さに驚いた。

「すごい…。思ってたよりずっと高いね」

「世界一高いんだよ。あれ、2番目だったっけ？ まあとにかく高いんだよ。634メートルもあるんだから。」

でも僕がすごいと思ったのは、このスカイツリー、法隆寺の五重塔の建築方法を採用してるんだって。すごいね？」

「法隆寺の五重塔！？ こんな近代的な塔に！？ それは確かにすごいね。法隆寺の五重塔の建築法が今でも通用しちゃうのがすごいのか、それをスカイツリーに採用しちゃうところがすごいのか分からないけど…」

僕は驚いて、改めて眼前にそびえる高いスカイツリーを眺めた。

そのとき、突然、パシャリ、とカメラのシャッターをきる音がして、僕は驚いてその方向を振り返った。

そこには、嬉しそうにデジカメで僕を撮っていた涼がいた。

「ちよ、ちよっと、何、いきなり写真なんか撮ってたんだよ！」

「旅行って言ったなら、記念写真くらい常識でしょ？」

どこまでもにこにここと笑う涼に僕は脱力した。

「あのさ、僕たち、旅行が目的で来たんじゃないんだからね。将来のために、ゲームショーを見に来たんだから」

「分かってるよ。でも、今の優の表情はあまりによかったから、つい撮っちゃった。」

あ、そうだ、せっかくなんだから、今度は二人で撮ろうよ。誰かに撮ってもらえるようにお願いしてくるね」

勝手にそう決めて、涼はその辺に通りがかった人に、カメラを渡していた。

（全然分かってねー）

僕はもう諦めて、涼と一緒に、スカイツリーをバックに、写真に納まったのだった。

> i 3 2 6 1 3 — 3 4 3 9 <

その時はすっかり失念していたのだが、後で思い返せば、この時の僕は、完全女装姿だったので、僕はその忘れてしまいたい過去を、写真と言う形で、永久に残してしまったのだった。

ついでに、感想も述べておくと、それを知った時の僕の後悔は、ほんぱなかった。

それで、その後、そろそろホテルのチェックインの時間が近づいていたので、僕たちはホテルへ向かい、チェックインを済ませた。

ホテルのフロントで名前を書いたりしている間も（名前は、高井優一ではなく、高井優、と書いた）、僕は、ずっと、男だつてバレたらどうしよう、と不安で仕方なかったの、ずっとおろおろしていた。

涼の方は、全くいつもと変わらず平然としていて、どうしてそんなに普通に振舞えるのか、僕には理解できないくらいだった。

僕たちが案内された部屋は、バスルームとトイレと洗面所がついているくらい、そんなに広くないツインルームだった。

高校生である僕達にそんな高い部屋に泊まるお金なんてなかったし、目的はただゲームショーを見るためだけだったのだから、それで十分だったのだ。

二人きりになると、涼は、荷物を色々整理し始めた。

僕は少し疲れていたの、荷物はその辺に置いて、とりあえずベッドに横になった。

「優、疲れたの？ 大丈夫？」

「少しね。でも、まだ夕食まで時間あるでしょ？ それまでゆっくりするよ」

そう言った後、僕はまた、眠りについていた。

\*\*\*

「優、起きて。そろそろ夕食の時間だよ」

また、涼に起こされた僕は、ぼーっと起き上がった。

「あ…、また寝ちゃった…」

そうつぶやいた僕に、涼はおかしそうに笑った。

「優って寝てばかりだね。まあ、僕は、優の寝顔を見ていたら、全然飽きなかったけど」

涼は、僕が寝ていたのを一人ずっと見ていたことを、ものすごく大事な秘密を打ち明けてくるかのように、嬉しそうに言った。

「あんまりいい趣味じゃないね」

だから僕は、少しむすっとして答えた。

「好きな人の寝顔を見て、幸せだなんて思うの、いけないの？」

「べ、別に、好きな人とかじゃないだろっ。そんなことより、夕食の時間なんだろ？ 早く行こう」

ベッドから立ち上がりかけた僕を、涼が制した。

「待って、優。寝てたから、髪が乱れてるよ。今、整えるから」

ベッドに腰かけた僕の前で、優しく手ぐしで僕の髪を整える涼を見ていると、僕は何だか不思議な気持ちになってきていた。

初めて涼と出会ったのは、「ニルトニア物語」の中だったから、直接会って話すことも、ましてやこうして触れ合うこともできなかった。

それなのに、今はこんなにも近くに涼がいて、僕に触れている。

だけど、高校を卒業したら、また遠い場所に離れ離れになってしまうのだ。

## 第十六章

夕食が終わって、お風呂を済ませると、僕はやっと全ての女装から解き放たれた。

うっとうしかったロングヘアのカツラはもうお風呂の前に外して、たし、メイクはお風呂で綺麗に落とした。

それ以外にも、フリフリで、スースーしていたスカートや、普段身に付けた事もないアクセサリーなど全ての女性衣装から解放され、僕はやっと普段の姿に戻れたのだった。

「あ、やっと僕は、僕を取り戻したんだっ！！」  
喜びにひたる僕を、涼は残念そうに見ていた。

「優の女装、よかったのにー。ま、また明日見られるからいいんだけどね」

しかし、そう言って、またすぐに笑った。

「よくないっ、全然よくないっ。もう絶対明日が最後だよ！」

そう言いながら、僕は持ってきていた旅行バッグの中から、パジャマを探していた。

明日は早かったから、もう着替えておいてもいいだろう、と思ったのだが、どれだけ探してみても見つからない。

どうやら、家に忘れてきてしまったようだ。

「パジャマ忘れてきちゃったみたい。ま、いつか。このバスローブで寝れば」

僕は、今着ている、ホテルに置いてあったバスローブを見ながらそう言った。

「僕はちゃんと持ってきたよ。でも、別に、バスローブで寝てもいいんじゃない？」

そんな会話をした後、僕たちは、明日のゲームショーのプログラムや、出展されるゲームのパンフレットなどを見ながら、色々語り合っ

「なんか、ニルトニアやめてだいぶ経つから、今のゲームって、もうあの頃と随分違ってるんだね」

「そうだねー。でも、僕たちがチェリプロに就職して、ゲームを創るときには、今以上のものを創らないといけないね」

「そうやって、昔のこと、今の事、そして未来のことを話していると、時間はあつという間に経っていた。」

「優、もう10時半だよ。明日は早いから、そろそろ寝ないと……」

「うわ、ほんとだ。全然時間経ってる感じしなかったから、気づかなかったよ」

僕は、それほど、将来の話に夢中になっていたのか、と驚いた。

いや、夢中になっていたのは、涼と過ごしている時間だったのかも、しれない。

ともかく、僕たちは、電気を消して、それぞれのベッドに入った。

僕は、昼間にたくさん眠りすぎたせいか、なかなか寝付けなかった。でもそれは、単にそのせいだけではなく、将来のことを涼と話したせいかもしれない。

将来に期待を抱く一方で、それまでの間、4年間も僕と涼は離れ離れになってしまっただ。

涼が東大に行くなら、涼は東京に。

僕は地元のチェリプロの専門学校に。

今日、ほとんど一日をかけた距離で、僕たちは離れ離れになってしまっことになる。

(また「ニルトニア物語」をやっていたときみたいに、涼は遠い存在になってしまっのかな……)

そう考えると僕はたまらなく寂しくなってくるのだった。

僕が、そうやって考えている間、何度も寝がえりをうっていたので、突然隣のベッドの涼が声をかけてきた。

「優、眠れないの？」

「…あ、ごめん、涼。何回も隣で寝がえりうってたら、気になって涼も眠れないよね。」

昼間に眠りすぎたみたいで、ちょっと寝付けなかったんだ。でも、これからは静かにしてるから、気にしないで眠ってよ」

「そんなに気を使わなくてもいいよ。別に、一晩くらい眠れなくたって、僕は平気だから」

「そんな訳にはいかないよ！ だって涼は昼間に全然眠ってないだろ？ 明日、眠くて、ゲームショー楽しめなくても知らないよ？」

「それは、優も一緒でしょ。優もちゃんと眠らないと…。そうだ、僕がよく眠れるおまじないをしてあげる」

暗闇の中で、涼の表情は見えなかったけれど、「おまじないをしてあげる」と言った涼は、きつと以前「ニルトニア物語」の中で、同じことを言ったときのるように、いたずらっ子のような、笑いを浮かべていたのだろう。

「へえ。今度はどんなおまじない？ 涼のおまじないは、ほんとに効くから、やってもらおうかな」

だから、僕も、おかしくなって、涼の言葉に乗った。すると、突然涼が、僕のベッドの隣に入ってきた。

「ちょ、ちょっと、涼！ なんで、こっちに入ってくるんだよ！」

「だって、優がおまじないしてほしい、って言ったから」

「いや、言ったけど、だからって何で、同じベッドに入らなきゃいけない訳!？」

「それはね……」

そこまで言った涼に、僕は強く抱きしめられていた。

「こっししないとできないおまじないだから……」

僕は、突然狭いベッドの中で、涼に抱きしめられて、訳が分からなくなかった。

「ずるいよ…。こんなの、おまじないじゃない。また、僕を騙して……」

「騙してなんかいいよ。僕も、優ときつと同じこと考えてた。苦しくて、寂しくて、こんなじゃ眠れないよ……」

だから、ほんの一瞬でいいから、優を強く抱きしめて、僕だけのも

のにしたかったんだ。

離れている間、ずっと忘れられないくらい、強く強く抱きしめておきたかったんだ……」

僕の至近距離でささやく涼の表情は、真っ暗な部屋の中でも、十分に見てとることができた。

それは、本当に辛そうで、悲しそうな表情だった。

（涼も、僕と同じことを考えていた？）

それなら、涼が眠れなかったのは、僕の寝返りのせいではなくて……。

そこまで思い至った時、僕は、涼の胸に全身を預けていた。

「ああ、涼の心臓の音が聞こえる。すごいドキドキしてるよ」

「そりゃあそうだよ。優とこんなに密接してるんだから」

「ほんとに、僕のことを好きなんだ」

僕は、恥ずかしさを隠すように、笑った。

「優は？ 優は僕のこと、どう思ってるの？」

「……大好きだ」

僕は、聞こえるか聞こえないくらいの小さな声で、やっとそう言った。

「ありがとう、優。嬉しいよ」

「でも、やっぱり僕は、涼を恋人にしたいとか、恋愛対象っていうの？ そういうふうには見られないんだ。

だけど、この先ずっと、そんな人は現れないよ。断言できる。

涼は僕にとって大切な人。かけがえのない人。…それでもいいの？」

僕が不安そうに聞くと、涼は笑っていた。

「それ以上は、僕も望んでない。というか、それが最高の望みだから。」

中学の時、『ニルトニア物語』の中で、言ったことあったよね？

覚えてる？ 優は、僕にとって特別だ、って。

あの時から、優と一緒にいる時間だけが、僕が、一番僕らしくいられる時間だったんだ。自然体で、居心地が良くて、ずっとこのまま

一緒にいたい、って心から思える人、それが優。だから、『特別な人』って言った」

涼は、暗い部屋の中で、遠くを見つめていた。

いや、きつと、あのニルトニアにいた僕を見ていた。

「そうだったんだ……。もちろん、ちゃんと覚えてるよ。それから、

僕にとつても、あの頃から涼は、『特別な人』だったよ……」

僕がそう言つと、涼は、とても嬉しそうに微笑んだ。

「優、確かに僕たちはこれから、遠く離れ離れになるかもしれない。

だけど、電話で声を聞くことならいつだってできるし、もしも優が、

今すぐにどうしても会いたいと願うことがあつたら、たとえどんな

時だって、僕はすぐに優のところへ駆けつけるからね。

だから、忘れないで。僕はいつだって、優の傍にいる……」

「うん、僕も涼の傍にいるから……」

僕がそう言い終わると、どちらからともなく、僕たちはお互いを強く抱きしめていた。

痛いくらいに強く僕たちがお互いを抱きしめたのは、離れ離れになつても、その感覚を忘れないためだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4750w/>

---

続ニルトニア物語

2011年10月12日07時13分発行